

## 要旨

東日本大震災を経験した高校生の生活状況と健康に関する研究

～1年11か月後の調査から～

原田 真帆

2011年3月11日に発生した東日本大震災では地震そのものの被害に加え、津波・火災・液状化現象・福島第一原子力発電所事故・大規模停電など多岐にわたり、被害は長期化しており、心身に与える影響も大きいと考えられる。そこで本研究では①福島県の高校生の東日本大震災から1年11か月後の学校生活、家庭生活、地域生活の現状、放射能への不安、感受性、健康状態を調べ、尺度を作成すること②作成した尺度と心身の健康との関連を明らかにすることを目的として調査を行った。

研究は精神的健康度、身体的健康度に関して現在の生活状況や放射能への不安、東日本大震災への感受性が及ぼす影響の調査であり、福島県の高等学校を対象とし、2013年1月から2月の間に自記式質問紙調査を行った。

現在の学校生活の状況では主因子法、プロマックス回転により因子の抽出を行ったところ、「勉強への影響」「先生との関係」「学校生活での震災の影響」「学校や友人関係の変化」「復興支援行事」「団結心」「学校生活の悩み」の7因子が抽出された。現在の家庭生活の状況では、重みなし最小二乗法、プロマックス回転により因子の抽出を行ったところ、「家庭生活への震災の影響」「家族との絆」「経済的不安定さ」の3因子が抽出された。現在の地域生活の状況では、最尤法、プロマックス回転により因子の抽出を行ったところ、「地域住民との関係の強化」「地域資源の減少」「地域環境の変化」の3因子が抽出された。放射能への不安では最尤法、プロマックス回転により因子の抽出を行ったところ1因子にまとまった。感受性では最尤法、プロマックス回転により因子の抽出を行ったところ「拒否的反応」「他者からの差別や偏見」「過敏反応」の3因子が抽出された。抽出された因子の信頼性を検討し尺度として用いた。

「精神的健康度」「身体的健康度」を従属変数、属性、作成した尺度を独立変数とした一般化線形モデルによる分析の結果、精神的健康度を悪化させる要因には、家族の同居形態の「母子家庭」、自宅の被害形態の「地震・津波」、「学校生活の悩み」が大きいこと、「他者からの差別や偏見」が大きいこと、「マスタリー」の低さがあった。身体的健康度を悪化させる要因には、「女子」、「勉強への影響」が大きいこと、「学校や友人関係の変化」が大きいこと、「学校生活の悩み」が大きいこと、「地域住民との関係」が小さいことがあった。

これらの結果から、高校生の心身の健康度には現在の生活状況だけではなく、放射能への不安やマスタリー、感受性も影響を与えていることから、放射能の影響の正しい情報の提供、マスタリーを高めることの必要性が明らかになった。しかし青年期である高校生の心身の健康には様々な影響があることも考えられ、今後も継続した調査が必要であると考えられる。

キーワード：健康 高校生 東日本大震災 福島県